Minamiaso Village
南阿蘇村

未来への轍

2016(平成28)年熊本地震 南阿蘇村復興記録誌

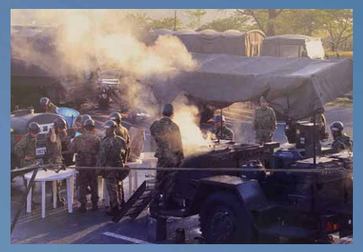
未来への轍（わだち）

2016(平成28)年熊本地震
南阿蘇村復興記録誌

2016（平成28）年熊本地震
南阿蘇村復興記録誌

未来への轍（わだち）

熊本地震から2190日の軌跡



2016（平成28）年4月14日午後9時26分、
そのわずか28時間後の16日午前1時25分。
熊本地方を震源とする最大震度６強の地震が
２度も発生し、南阿蘇村は甚大な被害を受けた。

轟音を響かせながら
あらゆる箇所で山の斜面が崩壊し、
流れこんだ土砂が道路や鉄道を寸断。
旧阿蘇大橋も崩落した。

「まさか阿蘇に大地震がおきるなんて…」
「これからどうやって生きていけばいいか…」
村民は身を切るような寒さと恐怖に震えながら
夜明けを待った。

この復興記録誌は、
未曾有の災害から村民が歩んだ
「６年・2190日の軌跡」を中心に構成した。
困難の中でどう知恵を出し合い、
前へ進んできたのか？
もがきながら描いたその軌跡が、
再び有事が起きた際に未来の人々を導く
「轍」となることを願って。

Contents

P3　第１章
データで振り返る熊本地震

P9　第２章
陸の孤島と化した交通インフラの寸断

P26　第３章
各地区がたどった2190日
◎袴野地区
◎立野地域
◎沢津野地区
◎長野地区
◎乙ケ瀬地区
◎黒川地区

P46　住民と学生の交流から生まれた復興イベント
「灯物語」

P51　第４章
住まい再建に向けた取り組み

P60　**復旧・復興を後押ししたさまざまな支援**
◎国土交通省 熊本復興事務所長　大榎 謙さん
　国土交通省 熊本地震復旧対策研究室長　西田 秀明さん
◎新上五島町からの派遣職員　坂田 満さん
◎日向市からの派遣職員　黒木 雅由さん
◎主な支援の一覧

P67　第５章
教訓を未来に生かす
「震災遺構」

P76　寄稿「未来へ」
◎熊本県知事　蒲島 郁夫さん
◎女優　宮崎 美子さん

P78　復興年表

P84　あとがき
南阿蘇村 村長 吉良 清一

コラム

P24　南阿蘇村 総務課　藤原 松男 防災官
P25　南阿蘇村建設業協会 会長　岩本 敏則さん
P31　「地獄温泉 青風荘.」　代表取締役 河津 誠さん
P48　南阿蘇西小学校　山下 洋 校長
P50　地域支え合いセンターの皆さん
P58　「阿蘇立野病院」理事長　上村 晋一さん
P59　「すがるの里」会長　垣 ます子さん
P64　東海大学卒業生　橋村 さくらさん
P65　「茶庵とちのき」　阿南 理恵さん
P66　熊本大学　鳥井 真之 特任准教授

第
1
章

データで振り返る熊本地震

4月16日未明に起きた本震の大きな揺れによって、
南阿蘇村各所で甚大な被害が発生した。
この章では、地震の規模、それらがもたらした
未曾有の大災害をデータで振り返る。

農地・インフラ・観光の被害状況

乙ケ瀬地区の大規模農地被害

農業被害

熊本地震の被害に重ね、6月豪雨の土砂災害で農地、農業施設に甚大な被害が発生した。2020（令和2）年5月、乙ケ瀬地区の大規模農地整備が一部完成した他、農業用水路の復旧工事も進み、黒川地区、乙ケ瀬地区など震災後初めて田植えをできた地区が多かった。田植えが再開したことで、神事も再開の目処がたち、各地区に賑わいが戻り始めた。

インフラ被害

電気

4月16日から村内全域で停電が発生。4月19日より電源車と通常送電により一部復旧。その後、4月28日から通常送電を再開。

水

発災直後から村内ほぼ全域で断水。最大、3,761世帯に影響が及んだ。その後、一部復旧したものの立野地区や長野地区の一部では断水が長く続き、避難所から自宅に戻る際や自宅再建に向けた障壁になった。

多くの住民が避難した南阿蘇中体育館

阿蘇東急ゴルフクラブのゴルフコース上に入った亀裂

土地や建物に甚大な被害を受けたメルヘン村の「ペンション風の丘　野ばら」

観光被害

農業と共に主要産業である観光業においても南阿蘇村は甚大な被害を受けた。

阿蘇大橋をはじめ、村に向かう主要交通路が断絶したことに加え、多くの観光客を誘客していたゴルフ場や宿泊施設などが地震被害を受けたことで休業を余儀なくされ、地震前の2015（平成27）年と比べ、地震発生年の2016（平成28）年の観光客数は約48%減少してしまった。

地震による被害が要因で、再建を断念し廃業した施設もあるが、甚大な被害を受けた「阿蘇東急ゴルフクラブ」（左記写真参照）や「くまもと阿蘇カントリークラブ」、震災前は6軒のペンションで賑わっていた通称「メルヘン村」で再建した「ペンション風の丘 野ばら」（左記写真参照、再開後は「南阿蘇 野ばら INN」）などのように、同地や別地で再開し営業している観光施設も数多くある。

第2章

陸の孤島と化した交通インフラの寸断

村内に甚大な被害を及ぼした熊本地震。中でも深刻だったのが、
村への「大動脈」とも言える主要交通インフラへの影響だった。
阿蘇大橋が崩落し、俵山トンネルも寸断。残された道は亀裂が入り、波打ち、
「徐行運転がやっと」という状態。
この章では、陸の孤島と化した当時を振り返るとともに、
現在（2022（令和4）年）までの復旧状況をまとめた。

交通インフラの復旧状況

2020（令和２）年10月3日
開通

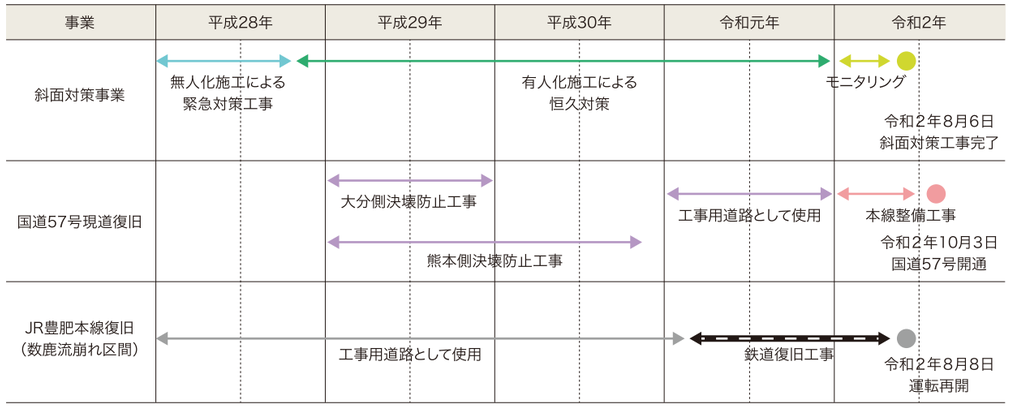
国道57号現道

2020（令和２）年8月８日
運転再開

JR豊肥本線

旧阿蘇大橋の西側の山から発生した「数鹿流崩れ（すがるくずれ）」は、崩壊長約700m、崩壊幅約200m、崩壊土砂量は約50万m³と推定され、熊本地震で最大級の斜面崩落となった。熊本と大分を結ぶ主要な交通・物流ルートであるJR豊肥本線、国道57号が寸断され、押し流された土砂被害等で阿蘇大橋も落橋するという大きな爪痕を残した。復旧工事は斜面の安全対策、道路、鉄道の工事が同時進行することになる。そこで阿蘇大橋地区復旧技術検討会が置かれ、学識経験に基づく意見を踏まえた工程を組むことで早期復旧にこぎつけた。

復旧スケジュール



■国道57号現道部

ＪＲ豊肥本線の復旧や、斜面恒久対策に必要な進入路・工事ヤードとして使用するため、まずは欠壊部の対策工事から着手。決壊防止工事が終了した2019（令和元）年からは工事用道路として使用し、2020（令和２）年に入り一般開放に向けて整備工事へと移行した。

復旧直後の国道57号現道部

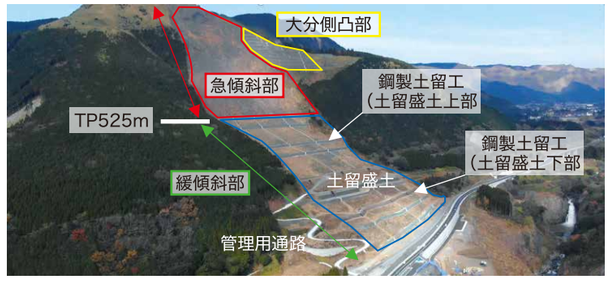
■JR豊肥本線復旧と国道57号線現道部開通に向けた、大規模崩壊斜面の復旧工事

無人化による緊急復旧工事

斜面上部には不安定土砂が残っており、余震によって崩壊する危険をはらんでいた。そこで二次災害防止に配慮しながら、斜面中腹に土留盛土の施工工事および不安定土砂の撤去を行った。当作業では雲仙普賢岳の砂防事業等で培われた無人化施工技術が活かされ、最大14台／日の無人化施工機械を稼働。その結果、安全性とスピード感を両立しながら復旧工事を進めることができた。

有人化による恒久対策工事

無人化による緊急復旧工事の目処が立った2017（平成29）年1月から、斜面の安定化対策に移行。斜面上部の急斜面における植生マット工やネット工、鉄筋挿入工、さらに斜面中腹部では山腹工に着手し、2020（令和２）年3月に斜面全体の工事が終了した。



■立野駅を復旧の拠点に

九州山地を東西に貫くJR豊肥本線は山岳路線が多く、外輪山を越える立野～赤水間は特に難所として有名。三段式のスイッチバックを設け、その勾配は33.3%を誇る。スイッチバック最初の転向部となる立野駅は、プラットホームや駅舎が被災した。復旧の障壁となったのは、周辺道路の狭さ。工事資材をスムーズに運搬することができなかった。そこで、120mあった立野駅のプラットホームを91mに短縮して早期復旧。同駅を拠点にレールなどを運搬することで、いち早い再開につなげた。

熊本地震後の立野駅

復旧後の立野駅

第3章

各地区がたどった2190日

◎袴野地区
◎沢津野地区
◎立野地域
◎長野地区
◎乙ケ瀬地区
◎黒川地区

南阿蘇村の中でも特に被害が大きく、ライフラインの復旧や生活再建に時間がかかった6つの地区の関係者による座談会を開催。震災直後の状況、復旧の障壁となったこと、それをいかに乗り越えたか、そして未来への思い。震災後、住民と役場の橋渡し役を担ってきた政策企画課集落支援員の北里かおりの振り返りもふまえ、取材班がまとめた。

※令和3年12月～令和4年1月取材
※取材時は新型コロナウイルスが世界的に流行。感染対策のためマスクを着用しています
※その他、感染対策に十分配慮し座談会を開催しました

北里かおり

南阿蘇村出身。1998年、南阿蘇村長野地区にて開窯。陶芸活動と共に、地域づくり団体やアートイベント事務局などを経験。熊本地震後は村内ボランティア拠点の運営などを経て2017（平成29）年4月より南阿蘇村役場集落支援員として被害が大きかった地区の再建相談や集落再生・活性化、外部支援の調整・情報発信などを行う。

個人の再建と集落の再生をふりかえって

～故郷の変貌と寄り添いの形～

2016（平成28）年4月。あの日から6年の歳月が流れました。前震からの余震と不安、疲れと眠気で寝入った頃の真夜中の本震。夢か現実か信じがたい出来事は、今思えば、被災者にとってその後数年間の様々な「困難な選択の始まり」でもあったと感じます。今日の居場所をどうするのか、今後の住まいや仕事は……。判断は難しく途方に暮れる日々。

2017（平成29）年には自宅再建の個別相談が始まり、担当した約300世帯の方へ相談会の日時調整を連絡する中で伺った皆さんの声を今でも忘れません。「住んでいた場所は本当に安全になるのか」「自宅と仕事を失い再建どころか生きていけない」。身に染みる訴えを、当時は共感の想いで寄り添う事しかできず、長時間お話を伺うこともあり、その後の仮設住宅や集落でも、悩みのご相談は続きました。

ある大学病院でも、震災関連のメンタルヘルスケアの研修が行われています。また、被災地の現状をお伝えした講話やラジオ番組でも、孤立やこころのケアは重要な課題となりました。有事の際、我が身を守るため、心身はどう変化するのか。大きなショック後は、感覚や感情の麻痺状態が続き、あえて環境の変化を鈍らせるような感覚がありました。そのことで乗り越えられることもあるのですが、無理がたたると後々症状が出てきます。ただ、心身の状態とは関係なく現状と向き合い、多くの選択や行動をしなければ、何も進まなかった現実があったことも見えない部分における被災者の苦難でした。

～それぞれの歩幅で～

2018（平成30）年からは、特に被害が大きかった6地区（袴野、沢津野、立野、長野、乙ケ瀬、黒川）の集落の再生に向け復旧工事等に関する「復興むらづくり協議会」の発足や地域活性をめざす「集落復興支援事業」の話し合いが始まりました。「家も無いとに何ができようかい！」。自宅再建や方針が決まらない方もおられたなか、新たな取り組みを始めることは確かに難しく、皆さんの状況を伺いながら当時の担当職員や支援員・協力隊と意見交換を重ねました。2019（令和元）年頃には、徐々に出始めた地域からの集落への想いやアイデアをもとに「住民主体」を目指し、地区の特徴を活かした10の活動団体が発足。今後の楽しみや交流につながる新たな取り組みの提案やサポートを一緒に行い、今では各地区がそれぞれの歩幅で一歩ずつ歩まれています。

（P28～P45の地区ごとのページに10事業の紹介を入れています）

～振り返りの想い～

この6年間、食や音楽、作業や交流など沢山のご支援のお話を頂き、陰となり日向となり支え、見守って下さった多くの方々の存在は南阿蘇村や被災者の大きな力となりました。また、自身の事を差し置いて地域の為に注力された方々。家族の為、そして自分を諦めないよう頑張ってこられた方々。大きすぎる痛みではありましたが、この経験により言葉は少なくとも、共感し分かりあい、寄り添える想いが生まれました。人生が深く意味のあるものだったと思える日が来ること、ひとつでも以前とは違った出会いや楽しみが見つかりますように心から願い、6年間の振り返りといたします。

立野地域

TATENO area

■人口の推移（令和３年１月末現在・住民基本台帳データ）
震災前　世帯数369　住民907名
震災後　世帯数272　住民548名

座談会の参加者（後方左から時計回りに）
村上 大樹さん（立野わかもん会）
郷 秀成さん（立野わかもん会）
髙瀬 大輔さん（立野わかもん会前会長）
中山 初義さん（立野区前区長）
吉野 光正さん（新所区前区長）
立野 峯之さん（立野区元区長）
上村 健さん（立野区元区長）
中尾 博昭さん（赤瀬区区長）
山内 博史さん（新所区区長）
佐藤 邦武さん（立野駅区区長）
本郷 竜童さん（立野わかもん会会長）
小野 広幸さん（立野駅区副区長）

【立野地区集落復興支援事業】

●「フットパスを活用した地域力向上事業」立野わかもん会
…地震からの復興が進む被災地を歩き地域の魅力を発信

世代間の垣根を越えた協力で賑わいを取り戻す

国道57号と阿蘇大橋の被害により地域が分断

大規模な土砂崩壊により国道57号が寸断し、阿蘇大橋が崩落。さらに、阿蘇長陽大橋は残存したものの、橋をつなぐ道路が隆起や崩壊によって甚大な被害を受け、通行不可に。その結果、南阿蘇村中心部や赤瀬区側と、立野区、立野駅区、新所区側が分断されてしまいました。村中心部に行くには、大きな被害を免れたグリーンロードやミルクロードを通るしかありませんでしたが、通れる道が限られている分、車が集中。一番渋滞がひどかった時で、立野地域から南阿蘇村の中心部まで片道４時間かかることもあったそうです。通常は10分で行き来できる距離ですから、気が遠くなるような状況。これでは暮らしを再建することができません。そこで、役場の交渉により、村中心部から分断された立野区・立野駅区・新所区は、大津町の本田技研体育館に避難所を開設してもらい、４月21日、旧立野小学校に避難していた方たちが移動することになりました。その後、仮設住宅も大津町に3か所（計113戸）建設。６月24日の岩坂仮設団地の完成以降、順次入居し、村の分断は長期避難の認定を受けて1年以上続くこととなります。「大津町において、避難所でお世話になった本田技研工業や、温かく受け入れていただいた仮設団地建設地の区長さんをはじめとする地域住民の皆さんには、感謝してもしきれない」と口を揃えて話される様子が印象的でした。

また、分断を免れた赤瀬区の皆さんも、普段当たり前のように通っている道路の重要性を痛感。「迂回路として震災から約１か月後に沢津野地区からファームランドへ抜ける道（村道沢津野～下野線）が開通するまで、南阿蘇村中心部にアクセスできませんでしたから大変でした」と振り返ります。

再建の妨げとなった水の被害と、断水

立野地域内の４区、それぞれが被害を受け住まい再建に向けて大きな課題が残りましたが、中でも新所区は川から離れていながら「水の被害を受ける」という予想外の出来事が起きました。黒川第一発電所（水力発電所）の貯水タンク決壊によって膨大な量の水が流出。一緒に大量の土砂を押し流したため、タンク下にあった９軒が流され、２名の尊い命が失われたのです。

「とにかく水と土砂がすごくて、周りの人も『助けないかん』ってわかっているけど自分のことで精一杯。寝巻きのまま裸足で避難所の旧立野小学校まで走り込みました」と、ある方は振り返ります。命からがらたどり着いた避難所には、泥水の中からようやく逃げ出した人もいて悲惨な状況でした。

また、避難所から住まいへ戻る際の障壁となったのも「水」でした。阿蘇大橋の対岸側に水源があり、立野地域は100年以上前からそこの水を引いて生活用水として使っていました。また、簡易水道も整備されていましたが、両方とも供給が寸断されてしまったのです。「今まで水の不自由さなんて1度も感じたことがなかったのに、まさか阿蘇に住んでいて自由に使えなくなるとは……」。生活基盤となる水と、道路。その二つが寸断され、帰りたくても、帰れないという状況が続くことになります。

1年間の長期避難中に安心して戻れる整備が進む

５月10日、大雨による土砂災害が起き、地震による倒壊を免れた家屋が再び被害を受けます。国道や村道も寸断され、住み慣れた土地に戻れる日が、また遠のいてしまいました。皆さんの心が折れそうになった時、合言葉にしていたのが「一緒に出て、一緒に戻る」だったそうです。「山の法面や道路の安全対策がしっかりとられ、『戻っても大丈夫』という太鼓判が押されて初めて、みんなで一緒に帰還しようと覚悟を決めました」と、当時を振り返ります。

しかし、当時の立野地域は村中心部との断絶、水道の長期断水、山腹崩壊の危険性等の問題を抱えていたことから居住することが困難であったため、県は立野地域（赤瀬区を除く）を2016（平成28）年10月31日「長期避難世帯」に認定しました。この認定の結果、対象の世帯が全壊世帯と同等の基礎支援金を受けることができ、家屋倒壊の度合いに関わらず仮設住宅に住み続けることができるようになりました。この認定の裏には当時の区長の要望活動がありました。その後、2017（平成29）年8月に阿蘇長陽大橋が復旧し、水道も仮復旧したことから、認定から1年後の10月31日に長期避難世帯の認定が解除。その間に法面の安全工事が進んだこと、さらに2018（平成30）年の春以降は仮設住宅への入居期限を迎えたことから、地区への帰還が徐々に増えました。

「現在も砂防工事は進行中ですし、『これでもう大丈夫』という終わりはありませんから、今後も工事は続いていくと思います。現在は立野地域全体で帰還を果たした方は６割にとどまっていますが、より安全性が高まり「雨が降ってもこれなら大丈夫」と思えるところまで進むことで１人でも多く戻ってきて欲しいですね」。

Column⑤

熊本地震からの教訓

リズムを相手に合わせ支えることが生活再建では重要

2016（平成28）年9月16日～2021（令和３）年3月31日までの4年６か月間、多い時で10人の生活支援相談員が住民の不安や悩みに寄り添い、住まい再建と生活再建支援に取り組んだ。

南阿蘇村
地域支え合いセンターの皆さん

関係機関と地域住民の間に立ち、生活再建のお手伝いをするのが、私たち「支え合いセンター」生活支援相談員の役目でした。スタッフのほとんどが熊本地震で被災。サポートする側も避難所生活や車中泊を経験しているからこそ、住民の不安や悩みに寄り添い、各種支援制度につなげたり、課題解決のお手伝いをすることができたと思います。また「お話を聞くことで逆に元気をもらい、お互い励まし合いながら前に進めた」というスタッフも少なくありませんでした。

生活環境の変化による引きこもりや孤立防止のため、村内はもちろん、村外の応急仮設住宅やみなし仮設に入居している方も１か月に１回は訪ねてお話を伺っていたため、２人ペアで４台ある車は常にフル稼働です。しかも週に１回、被災住民と地域住民の交流を図るためのサロンを6か所で開催していたので、その準備で目が回るような忙しさです。それでも、仮設団地を訪ねた時に「今日はまだ誰とも喋っとらんかった」と喜んでもらえると嬉しくて。2017（平成29）年の訪問回数は延べ17,941回、2018年（平成30）年は13,462回を数え、積極的な活動がスムーズな生活再建につながったと思います。

サポートの難しさを痛感したのは、仮設団地から災害公営住宅への転居が進んだ後です。今までは仮設団地で定期的にサロンを開催し、交流を図ってきましたが、災害公営住宅では住民が自主的にコミュニティを形成する必要がありました。でも、長年住み慣れた場所を離れ１人で住む高齢者にはなかなか難しく、「自宅再建＝サポート終了」ではなく、その後も長く寄り添う必要があると痛感しました。再建が進むにつれ生活支援相談員も減り、最後は２名になりましたが、「できることを、できる限り」と考え、災害公営住宅2か所でも週に１回お茶会を開催することにしました。そのサポートがきっかけとなり、後に災害公営住宅の草取りをしたり、花を植えたり、住民の自主的な活動と交流につながった点は良かったと思います。「復興支援は被災者のリズムで」今回の活動で得た教訓です。

左／仮設団地６か所の「みんなの家」で週１回開催していたサロン。
右／2017（平成29）年6月に大津町で開催した第１回ふるさと交流会。54世帯96名が参加

立野地域の災害公営住宅馬立団地を空から撮影

第4章

住まいの再建に向けた取り組み

村内の被害は特に旧長陽地域が甚大で、
多くの住民が住み慣れた家を離れ避難所での生活を強いられることとなった。
この章では、発災直後の避難状況をまとめるとともに、
住まい再建に向けた取り組みを時系列に紹介。

5月16日

●2次避難所
（グリーンピア南阿蘇［東館］、［コテージ］）入居開始
●避難所支援バス運行開始
（休暇村南阿蘇～肥後大津駅間　毎週月・水・金運行）

5月17日

●第2回2次避難所入居募集開始
【19時現在の避難者数は720名】

5月18日

●2次避難所　休暇村入居開始

5月19日

●り災証明書発行開始
※立野・新所・立野駅

5月20日

●自衛隊撤退
●2次避難所（小笠原［阿蘇市］）入居開始
●第2回2次避難所募集締切（世帯数／申請106・決定106）

5月21日

●2次避難所（ファームランド）入居開始

5月22日

●り災証明書発行（22日～23日長陽庁舎）
※沢津野・黒川・牧場・乙ケ瀬・下野・赤瀬
●生活再建に関する受付窓口設置

5月23日

●1次避難所2か所
（久木野総合福祉センター、南阿蘇西小体育館）閉鎖。
（残り計6か所）

5月24日

●1次避難所1か所（南阿蘇中体育館）閉鎖。（残り計5か所）
【19時現在の避難者数は805名】

5月26日

●り災証明発行（26日～27日久木野総合センター）
※白水地区、久木野地区

5月28日

●り災証明書発行（28日～・久木野庁舎）※村全域
●被災証明書発行数／1,822件

5月29日

●公費解体受付開始

5月31日

●避難者数／883名（自主避難を除いた集計を開始）
●水道断水／742世帯

6月1日

●総務課に復興推進室を設置（職員4名）

6月8日

●本田技研体育館において、民間賃貸住宅借上げ事業
（みなし仮設住宅）の申請受付窓口を設置

5 第5フェーズ 応急仮設住宅への移行

7月7日

●長陽運動公園仮設団地入居者説明会（長陽庁舎）

7月8日

●岩坂仮設団地入居者説明会（大津町岩坂公民館）

7月27日

●公費解体着工

7月31日

●南阿蘇鉄道部分運転再開（高森駅～中松駅区間7.1km）

8月5日

●室南出口仮設団地入居者説明会（大津町仮庁舎会議室）

8月12日

●本田技研体育館避難所閉鎖（キッズルームのみ残る）

8月15日

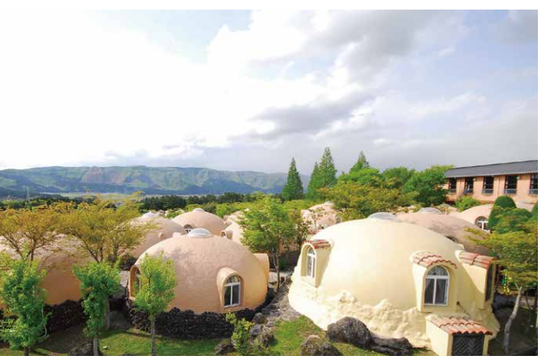
●避難者数／611名
●水道断水／692世帯

8月23日

●大津町仮設団地連絡バス運行開始（毎週火・木曜日）

8月25日

●加勢ノ上仮設団地入居者説明会（長陽体育館2F）



2次避難所の1つ阿蘇ファームランドにあるドームホテル

観光施設を活用し2次避難所を開設

地震の影響で営業が難しくなったホテルや旅館、観光施設の協力を受け、速やかな2次避難所開設につなげることができたことは、南阿蘇村ならではの利点だった。入居に際しては、高齢者と持病がある方から優先的に応募を募り、体調や希望をヒアリングする意向調査に基づいて優先順位をつけることで、不公平感が出ないように配慮した。また、ペットに関する鳴き声や衛生面の苦情が寄せられていたため、「カドリードミニオン（阿蘇市）」の離れの宿「小笠原」をペット同伴避難所とした。2次避難所の開設と同時進行で、仮設団地の建設にも着手した。

8月26日

●室第2仮設団地入居者説明会（大津町仮設庁舎会議室）

8月31日

●県道149号（河陰阿蘇線）一部仮復旧
●本田技研体育館内ちょうよう保育園大津キッズルーム閉鎖

9月16日

●阿蘇登山道（阿蘇吉田線）昼間に限り一部通行可となる

10月1日

●長野、袴野地区断水解消

10月2日

●東急分譲地住民説明会（久木野庁舎集会ホール）

10月5日

●下野山田仮設団地入居者説明会（長陽体育館2F）
●下野山田仮設団地バス停を新設

10月7日

●乙ヶ瀬、沢津野区住民説明会（旧長陽西部小体育館）

10月8日

●黒川、赤瀬・牧場区住民説明会（旧長陽西部小体育館）

10月9日

●立野、新所、立野駅区住民説明会（大津町老人福祉センター）

10月11日

●大津町役場内南阿蘇村職員駐在所開設
●大津郵便局での証明書受け取りサービス開始
●避難者数／21名（阿蘇ファームランド）
●水道断水／478世帯

10月12日

●熊本県に立野地区の長期避難世帯認定申請書を提出

10月31日

●長期避難世帯の認定
※立野地域（立野、新所、立野駅）360世帯880名が対象

11月6日

●12時　村内全避難所閉鎖

11月14日

●村内全域（立野を除く）断水解消

6 第6フェーズ 主要インフラの復旧・住まい再建に向けて相談会開催

12月24日

●11時　県道28号（俵山トンネルルート）仮復旧

平成29年 2017

1月10日

●大津町、南阿蘇村間スクールバスの運行開始（小中学校）

3月25日

●南阿蘇村役場新庁舎落成、新たな復興への拠点となる

4月1日

●復興推進室が復興推進課に変更

4月17日

●第1回村長出張座談会（袴野消防詰所、袴野区）

6月21日

●住まい再建個別相談会開始
「長陽運動公園仮設団地みんなの家」

8月27日

●12時　阿蘇長陽大橋応急復旧

8月31日

●立野・新所・立野駅区断水解消
（東京エレクトロン九州による井戸の設置により）

10月4日

●県道阿蘇吉田線（南登山道）応急復旧

10月30日

●立野地域の長期避難世帯解除

12月14日

●俵山トンネルルート部分開通（鳥子地区区間）

建設中の岩坂仮設団地

村内外に8団地・401戸の応急仮設住宅を建設

2016（平成28）年4月24日に、仮設団地建設地の選定を開始した。防災計画では長陽グラウンドをはじめ4か所を予定していたが、実際は避難者の駐車場や自衛隊・消防などの車両、支援物資輸送のヘリポートとして使われていたために建設を断念。最終的に村内外の民有地にも建設することになった。5月10日、長陽運動公園仮設団地から着手し、村内に5団地288戸、大津町の全面協力により同町に3団地113戸を建設。規模の大きな団地には集会所や談話室を併設し、入居者のスムーズなコミュニティ形成につなげた。なお、入居者の要件は当初、「住居が全壊および大規模半壊により居住する住宅がない世帯」に限っていたが、要件が緩和され、「半壊で解体予定、ライフラインが断絶している」など長期にわたり自らの住居に居住できない世帯も認められた。

復旧・復興を後押ししたさまざまな支援

国土交通省 九州地方整備局
熊本復興事務所長
大榎 謙 さん

国土技術政策総合研究所
熊本地震復旧対策研究室長
西田 秀明 さん

Profile
「熊本復興事務所」と「熊本地震復旧対策研究室」は、平成29年4月に南阿蘇村旧長陽村庁舎内に設置された国土交通省の組織。熊本地震で被災した立野地域の大規模崩壊斜面対策や国道325号阿蘇大橋、村道栃木立野線長陽大橋ルートなどの復旧を進めた。

陸の孤島から、驚異の復旧の最前線に立ち続けた。世界に誇れる橋・道路を復旧・建設

（大榎所長）

事務所の看板もだいぶ色あせ、年月の経過を感じます。開所から5年、国が担当する全ての災害復旧事業を完了し、2021（令和3）年度末をもって無事、事務所を閉じることができました。これは地域の皆様のご理解とご協力、建設業界の高い技術力と復旧・復興に向けた熱い思いに支えられ成し遂げられたものであり、改めまして、お世話になったすべての方々に深く感謝申し上げます。

この熊本地震からの復旧・復興事業には発災当初より多くの方々が携わっており、当所職員もそれをしっかりと認識したうえで、責任感・使命感をもって業務にあたってくれたものと思います。

国道57号や国道325号新阿蘇大橋などの開通時には、一時渋滞を呈するほど多くの方々が来訪され、交通状況を見守る沿道の職員へ車窓から多くの方々が手を振ってくださったことは特に印象深く、記憶に残っています。

現在、南阿蘇鉄道の復旧が急ピッチで進められています。各自治体や地域の方々が推進している創造的復興への取り組みとの相乗効果により、当地域が一層発展することを心から願っています。

（西田室長）

当研究室は、熊本地震で被災した道路構造物の復旧をより加速化させるために、直面する技術的課題の解決を図ることを狙いとして復興事務所と同じ庁舎内に設置されました。当研究所としては災害復旧現場に研究室を設置する初事例でした。

復旧工事は長い目で見れば一時的なものですが、復旧した道路は使い続ける中でさまざまな状況に遭遇しえます。ちょうどこの原稿を書いている時期にも東北地方で大きな地震がありましたが、今後も再び大きな地震を受けるかもしれません。地震自体を止めることはできませんが、人や物に影響を及ぼす「災害」を軽減するためにできることはあります。このようなことから、復旧にあたっては、単に早く直すというだけでなく、再び熊本地震のような被災が生じないようにすることも意識して課題の解決にあたりました。阿蘇長陽大橋の立野側の橋台の構造の見直しはこの一例です。

これで道路の復旧は完了しましたが、復興という点ではまだ道半ばかと思います。これからは復興が着実に進みつつある南阿蘇の魅力を伝える広報係として、違う形でお役に立てればと思います。

新上五島町職員
坂田 満 さん

Profile
土木の専門職として平成28年8月から10カ月間派遣され、道路災害復旧工事を着工するために必要な設計図の精査、積算、査定業務を担う。平成30年7月から再派遣され、復旧の最前線に立ち続けた。

道は被災者の希望の光。スピードを重視しつつ質も妥協なく復興

南阿蘇村と新上五島町は姉妹町村提携をしていますが、元々は合併前の長陽村と新魚目町が結んでいた提携をそのまま引き継いだものです。地震の第一報を聞いた時、「姉妹都市で縁が深い新魚目町出身の私の出番かな」と予感。実際、2016（平成28）年8月1日付で10か月間派遣されることになりました。当時は倒壊した家屋がそのまま残り、あちこち斜面崩壊が起きて通れない道だらけ。南阿蘇村に着いてすぐは「やっていけるか……」と不安を覚えました。

主な業務は、最優先で取り組まないといけない道路インフラの復旧に伴う作業です。南阿蘇村の職員には土木の技術者がいませんので、全国各地から私のような専門職員が集結。ひたすら、災害査定が終わった案件の設計を確認→修正→積算→査定を受けるという業務を繰り返しました。災害復旧は「現状復旧」が基本。その上、スピードを重視しなければならないことは十分わかっています。しかし、「これだけ大変な思いをしたんだから、少しでも住みやすい郷土に戻してあげたい」という思いが強く、一切妥協はありませんでした。時には、「このままの設計では納得できない」と、派遣された技術者たちが休日返上で手直ししたこともあるほど。国からは「12月までに査定を終えてくれ」と言われていたので、連日、宿舎の門限23時ギリギリまで残業してなんとか乗り切りました。

2017（平成29）年5月、「もう1年残ってもいいかな」と思った矢先に次の職員にバトンタッチ。まだ道半ばだったので心残りでしたが、後任が安心して任せられる方だったこと、そして「被害状況から考えるともう一度出番があるだろう」と考え派遣を終了させました。1年2か月後、再び戻ってきた南阿蘇村は劇的に変わっていました。阿蘇長陽大橋の仮復旧が終了し、道路の開通に伴いお店が再開。住民も戻り始めた姿を見て、改めて「道」の重要性を実感しました。この仕事は、生活基盤を支えるものをイチから作り上げる達成感が格別ですが、災害復興の現場はなおさらです。全ての道が開通したら、一人で訪れて喜びを噛み締めたいですね。

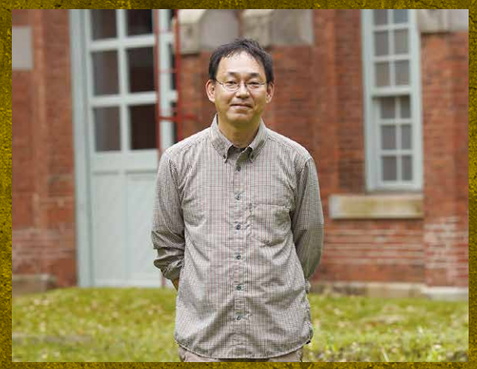
左／復旧した阿蘇大橋地区。右／多くの人々で賑わう新阿蘇大橋展望所「ヨ・ミュール」

左／1回目の派遣時に他地域の派遣職員や村の職員との記念の一枚。右／多忙な日々は南阿蘇村の美食で心を癒しました

熊本地震からの教訓

持続的な阿蘇の暮らしのため阿蘇の自然や歴史を愛し、学び、知る

熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター
減災型社会システム部門
鳥井 真之 特任准教授

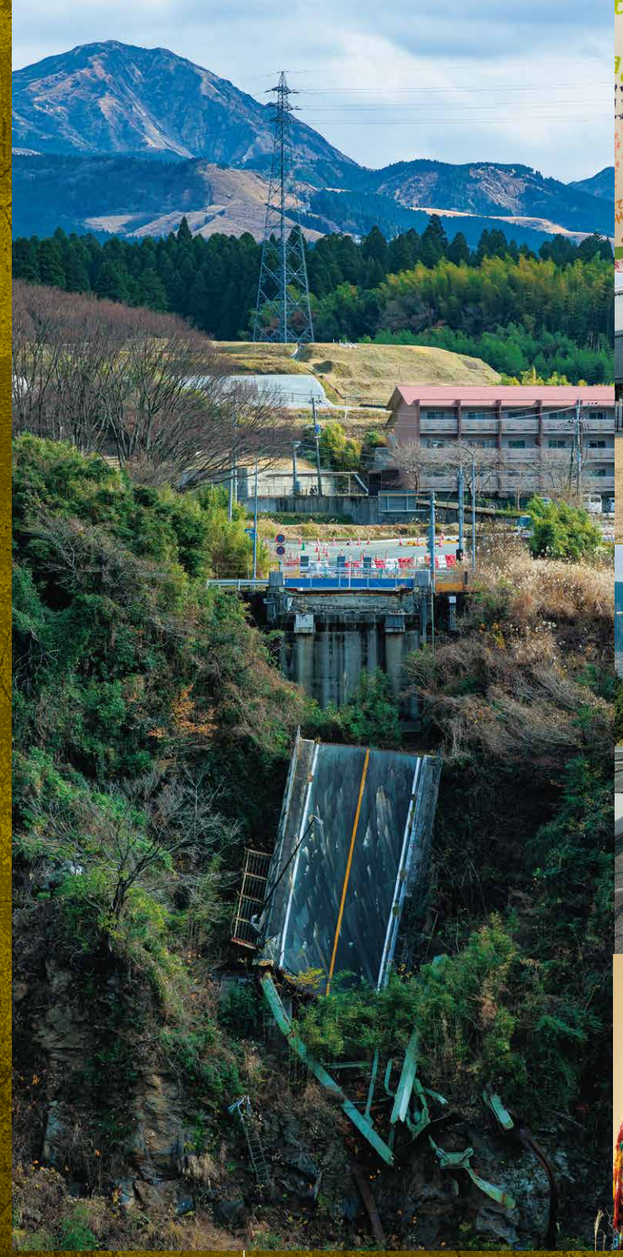


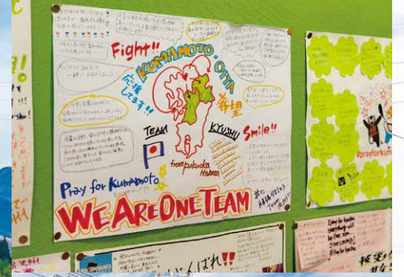
公益財団法人 阿蘇火山博物館所属。火山学や層序学など専門知識を生かし、地域に根ざした防災・減災教育に尽力。震災後は南阿蘇村旧立野小学校1階で、熊本大学が運営する阿蘇サイエンスカフェを開催。

阿蘇の豊かな自然や文化をテーマとして熊本大学では長年調査研究に取り組んできました。そのような折に発生した熊本地震では、私の所属する減災型社会システム実践研究教育センター（現：くまもと水循環・減災研究教育センター減災型社会システム部門）は、地震直後から断層や崩壊斜面など被災地調査を行いました。その結果、地震で緩んだ斜面上部で崩壊や亀裂が多数見つかり、大雨による土石流被害が心配されたことから、急遽、村や県と協力し地震被害の状況とこれから起こりうる土砂災害について村内各所で住民説明会を開催するなど被害軽減に注力しました。そして、その後の復旧・復興の段階では復興まちづくり計画策定委員会や震災遺構保存検討委員会、そしてむらづくり協議会などへセンター所属の教員が参加するなど適時に支援活動を続けています。

2019（令和元）年8月からは村の復興をより推し進めるため、南阿蘇村と熊本大学で包括的連携協定を締結し関係強化を図りました。その取り組みの中で旧立野小学校を拠点として調査研究で明らかとなりつつある阿蘇の自然や歴史について、お茶を飲みながらゆったりとした対話形式で共に学ぶ「阿蘇サイエンスカフェ」を開催しています。美しい阿蘇の景観や豊かな土地は火山噴火や活断層など自然現象によって形作られたものですが、一方その時その場に居合わせると熊本地震のようにとんでもない災害となってしまいます。まさに熊本地震の震災遺構は災いと幸が表裏一体であることを私たちに示してくれています。阿蘇の自然の成り立ち、人々の暮らしや歴史など地域のことをよく知ることは豊かな暮らしを持続的に享受し、また、自然災害に巻き込まれないようにするためにとても大切なことだと考えています。これからも豊かで災害に強い村づくりのお手伝いができればと思っています。

左／2016（平成28）年6月7日 旧久木野小での住民説明会の様子。右／2018（平成30）年12月8日　震災遺構を利用した高校生の防災学習





第5章

教訓を未来に生かす「震災遺構」

観測史上例を見ない大規模災害により、熊本県内で死者273名、負傷者2,738名、家屋被害20万棟など、大きな爪痕が残りました。
南阿蘇村を含む8つの市町村は、この経験や教訓を風化させることなく確実に後世に伝承し、防災対応の強化を図るため、震災遺構や拠点をめぐる回廊形式のフィールドミュージアム「熊本地震 記憶の回廊」を整備した。

経験を生かし村の防災を強化

南阿蘇村復興公園（防災公園）

地域防災の要であり交流の場としても期待

南阿蘇村役場 総務課 防災・消防係
大山 雄基 主幹

防災公園が完成した場所には、約20年前に村が整備し、分譲を行なった高野台団地がありました。しかし、熊本地震によって大規模土砂崩壊が起き、全16戸のうち12戸が全壊、尊い命も奪われました。震災後、ここをどのように復興させるか検討会が持たれた結果、村内の避難場所の空白地帯にあたることから「防災公園」としての整備が決まりました。

移転を希望する11戸の被災宅地跡を村が買い取り、2020（令和2）年3月に整備が完了。一時的な緊急避難場所として使えるように、敷地内の様々な箇所に工夫をこらしてあります。例えば、停電を念頭においたソーラー電灯や、炊き出しに使えるかまどベンチ、汲み取り式の防災トイレなどを完備。また、熊本地震の経験を生かし、約100台が車中泊できるスペースを確保しています。というのも、学校のグラウンドを車中泊の車が占めていたため「災害ゴミ」を置くことができず、別の土地を整備するために70億円かかった経緯がありました。広くとった駐車場は、有事の際は車中泊や自衛隊の野営地として活用できますし、平時は地区住民のイベント開催にも使って欲しいですね。

また、有事の際、役場の職員は村内全体の対応に追われるため、自分たちで生き抜く力を地域ごとに協力し身につける必要があります。そこで、2021（令和3）年12月5日に、第一回目の防災訓練を実施。黒川地区の住民約10名に参加いただき、どこに備蓄倉庫があるのか、設備の使い方はどうなっているのかを確認してもらいました。今後、お祭りなどでかまどを使うこともできますので、普段からこの場所に慣れ親しみ、防災力を高めるとともに「記憶の伝承の場」になっていくことを願います。

震災前のこの場所は、春になると桜が美しく咲き誇る、地区の方にとって憩いの場所でした。つらい記憶を乗り越え、新たな地区の拠点となるように、一緒に活用していきましょう。

❶かまどベンチ

災害が起こった時に「かまど」として利活用できるベンチを６基設置。「かまど」は炊き出しなどで調理に使用できる仕組み。

❷ソーラーパネル

備蓄倉庫の屋根と、敷地内数カ所にソーラーパネルを９基設置。停電が起きても電気を確保できる他、日頃から敷地内の運営に必要な電気を供給している。

❻防災トイレ

ベンチの下には災害用トイレが11基設置されている。倉庫の中に収納されている仮設テントを設置することで、プライバシーも確保。

❸駐車スペース

災害時に自衛隊の野営地として活用したり、避難者がテントを張るためのスペースとして、駐車場を広く（普通車約100台分）確保した。

❺水の缶詰（耐震性貯水槽）

地下タンクに40,000ℓ（40㎥）の水が入っており、鉄蓋・密閉蓋を開けて浄水器で汲み上げると、緊急用飲料水として利用できる。

❹備蓄倉庫

災害、緊急時に備え、消化や救出活動に用いられる物品や、保存食などを備蓄している。

南阿蘇村復興年表

2018

平成30年

1月4日
●阿蘇立野病院全館診療再開

3月3日
●南阿蘇鉄道災害復旧工事着工式（立野〜中松間）

4月15日
●黒川ウォーク開催「旧長陽西部小学校」

「震災から2年のいまを知る」として「学生村」と呼ばれていた黒川地区の現状と復興の歩みを学生語り部やジオガイドの案内で歩き、地元住民との交流を行った。

11月30日
●ONE PIECE熊本復興プロジェクト ルフィ像除幕式
（熊本県庁）

2019

平成31年

2月15日
●村内最初の災害公営住宅（下西原第1団地）落成式

3月10日
●阿蘇サイエンスカフェ開催（旧立野小学校など）

3月18日
●熊本地震伝承公式アプリ「つなぐ」の配信がスタート

4月14日
●立野わかもん会による第1回立野フットパス開催
（立野地域協議会）

令和元年

5月27日
●「すがるの里」東海大学実習生への弁当提供開始
（黒川地区協議会）

「学生村」と呼ばれた黒川地区で、下宿やアパートを営んでいたお母さんたちが立ち上げた有志の会「すがるの里」。東海大学生が実習を行う際にお弁当を作ることで、交流を育み続けた。また、復興弁当と語り部等がセットになった交流プログラムも始動。

6月1日
●はかまの会発足、袴野地区をヤギで除草、
獣害対策の試みを開始（袴野地区協議会）

6月14日
●「南阿蘇郷史談会」による郷土史講座を開始
（長野地区協議会）

6月16日
●「おとがせ桜ん会」発足、乙ヶ瀬地区を新たな桜の名所にするための活動を開始（乙ヶ瀬地区協議会）

8月24日
●立野地域夏祭り開催

9月
●黒川地区のアーカイブ制作事業に向けた活動を開始
（長野地区協議会）

9月14日
●俵山トンネルルート（県道熊本高森線）全線開通

10月31日
●あざみヶ池整備事業として花の苗などを植える活動を開始
（沢津野地区協議会）（沢津野地区公園管理組合）

12月1日
●第１回　みなみあそ復興マラソン大会

2020

令和2年

2月11日
●白川地区で震災後4年ぶりに野焼き再開

3月4日
●南阿蘇村復興公園（防災公園）落成式
（※コロナウイルス蔓延防止により中止）

5月1日
●5月初旬から沢津野、乙ヶ瀬、黒川地区にて
順次田植えの再開（5年ぶり）

5月10日
●「黒川やまめ活性化事業」としてやまめの養殖を再開
（黒川地区協議会）

8月1日
●熊本地震震災ミュージアム
（旧東海大学阿蘇キャンパス）一部一般公開開始

8月8日
●JR豊肥本線が全線再開

10月3日
●国道57号現道部開通（立野〜赤水）
●数鹿流崩之碑除幕式

待ちに待った国道57号線の開通。県内外から観光客が多く足を運び、震災以前の賑わいが少しずつ戻り始めた。